

序 章 制度と政策をめぐる二つの視点

「賢い人」と「弱い人」 ナイトの洞察 理論と政策

第Ⅰ部 自由と責任

第1章 税と国債——ギリシャ危機を通して見る

ギリシャの徵税能力 日本の国税庁 脱税の歴史 課税への反乱 デモクラシーと国家債務 ヒュームの議論
課税と自由の対立

第2章 中央銀行の責任——なぜ「独立性」が重要なのか

金融政策の専門性 中央銀行の理論的根拠 バジヨット
の考え方 現代への教訓 独立性と「秘密主義」 発

券銀行はひとつだけか

ハイエクの貨幣発行自由化論

理論と実際は別

第3章 インフレーションの不安——貨幣は正確には操作できない……

所得と富の強制移転 インフレが加速するとき ハイパーインフレの恐怖 第二次世界大戦直後のハンガリー
マネーの定義の難しさ ハイエクの警告 自己実現的期待という罠

第Ⅱ部 平等と偶然

第4章 不確実性と投資——「賭ける」ことの意味……

哲人ナイトの貢献 リスクと不確実性 不確実性に賭ける
る 賭博と人間 保険の役割と問題 ブランドの機能
有限責任という不思議 「自由か規制か」を超えて 市民としての株主

第5章 貧困と失業の罠——その発見から現在まで

スラムはなぜ生まれるのか 貧困と格差 階層の流動性
はあるか ワーキング・プア 最低賃金法のディレンマ
失業問題の発見 失業保険というアイデア 完全雇用
という政策目標

第6章

なぜ所得格差が問題なのか——人間の満足度の構造
豊富な情報は「やる気」をそぐ? 憧れと嫉妬 「客観的」格差と「主観的」満足度 認識の二重構造 アダム・スミスの考察 境遇変化の速度 富と権力の贅美者たち 比較と差の過大評価 能力と相続

第7章

知識は公共財か——学問の自由と知的独占

偶然による発見 学問の自由の働き 終身在職権の是非
言論の自由 知的独占は社会に益があるか 知識の共有
化と生産性

消費の外部性——消費者の持つべき倫理を考える

消費の副作用　流行と美意識　倫理は習慣である　曖昧な概念

消費も価値を創造する　次世代のために

第三部 中庸と幸福

第9章

中間組織の役割——個人でもなく国家でもなく……

平等化と結社の関係　　受け合う術を学ぶ装置　　米国における結社　　政治活動より社会貢献　　國家財政への貢献
結社数の歴史的動向　　中間組織の位置づけ　　中間組織としての企業

第10章

分配の正義と交換の正義——体制をいかにデザインするか

カモノハシのような国家　　アリストテレスの「正義論」

トマス・アクィナスの整理　　スミスからシジウイックへ

「自由で公正」とは　　補完する原理